

# 明治初期の農業結社と大日本農会の創設（1）

— 東洋農会と東京談農会 —

友 田 清 彦\*

**要約**：明治14年（1881）に創設された大日本農会は、日本最初の全国的な規模の農会であるが、その最も重要な母体となったのは、東洋農会と東京談農会というふたつの農業結社である。東洋農会は、下総牧羊場長岩山敬義を中心に、同場の関係者によって明治12年（1879）に創設され、のちには内務省勸農局の農政官僚や府県の勸業官吏が会員に加わった。また、東京談農会は、小澤善平ら種苗業者たちによってはじめられた共同農事会を起源とし、三田育種場場長池田謙蔵の尽力によって、明治13年（1880）に創設された。同会の会員は東洋農会に比べて少ないが、三田育種場職員のほかに老農などの実務家を含むことを特徴としている。このような、いくつかの性格の異なった農業結社は、それぞれ一定の範囲の人的なネットワークでもあったが、それらのネットワークの結節点として形成された集大成が大日本農会であった。本稿は以上の点を考察した論文の前半部である。

**キーワード**：明治農政、農業結社、大日本農会、東洋農会、東京談農会

## 目 次

- I. はじめに
- II. 下総牧羊場と東洋農会
- III. 三田育種場と東京談農会……以上、本号
- IV. 大日本農会の創設……以下、次号
- V. 創設時の大日本農会会員たち
- VI. おわりに

## I. はじめに

明治7年（1874）1月の内務省勸業寮設置をもって初めて、本格的かつ系統的に展開される明治前期勸農政策において、当時、農社、勸農会社、農業会社などとも呼ばれた農会の創設・育成は、農学校や農業試験場また農業博覧会とならぶ、最も重要な施策の一つであった（友田、1995：40-54）。わが国最初の全国的な農会は、言うまでもなく大日本農会であり、農政史上また農事改良史上等て果たしたその役割はきわめて大きい。

ところで、明治14年（1881）8月に刊行された

『大日本農会報告』第1号掲載の「本会創立ノ概略」は、大日本農会創設の経緯について、「本会ハ東洋農会ト東京談農会トノ二会ニ胚胎シ（中略）東洋農会ハ明治十二年四月千葉県下々総国印旛郡牧羊場ニ於テ開設シ東京談農会ハ東京三田育種場内ニ於テ十三年三月ノ創立ニ係レリ」（大日本農会、1881：1）と述べている。すなわち、大日本農会の直接の母体となったのは、東洋農会と東京談農会である。また、上の引用文のあとの割り注に「明治八年ノ創立ニ係ル開農義会ノ会員モ亦本年ヲ以テ東京談農会ニ合セリ」（同上：2）とあるように、開農義会は東京談農会に合流することで、これも大日本農会の母体のひとつと見なしうる。これらの点については、既往の研究<sup>1)</sup>で早くから明らかにされていたが、記述内容は上記「本会創立ノ概略」をそのままなぞったものにすぎず、それ以上に実証的な検討が行われたことはなかった。

そこで本稿では、大日本農会の母体となった東洋農会および東京談農会等がどのようにして創設され、どのような組織であったのか等について検

\* 東京農業大学国際食料情報学部

討することを通じて、大日本農会の成立過程について明らかにする。

## II. 下総牧羊場と東洋農会

大日本農会のモデルと言われるのは、イギリス王室農業協会であるが、これをわが国で最初に紹介したのは、岩山敬義であった。岩山は、本稿の主題にとってきわめて重要な人物なので、以下まずその略歴を紹介しておこう(友田, 2002a : 15-26 ; 2002b : 78-90)。

・岩山敬義(いわやま けいぎ : 1839-1892)

天保10年(1839)10月、薩摩藩士岩山郷兵衛直克の長男として、鹿児島に生まれた。父郷兵衛は、西郷隆盛の二番目の妻糸子の父八郎太直温の兄であり、したがって敬義と西郷隆盛とは義理の従兄弟であった。幼名は十郎、長じて直樹また壮八郎と称し、のち敬義と改めた。号は大甫また閑堂。13歳のとき島津斉彬の小姓に抜擢され、安政5年(1858)斉彬死去のあとは斉興の小姓となったが、翌年に斉興が没すると表方吏員、さらに薩兵隊副隊長となった。文久4年(1864)、のちに外務官僚として活躍する開成所句読師の上野景範から英学を学んだ。慶応2年(1866)以降は、嵯峨根良吉から英学を学び、また藩が雇用した仏国陸軍士官から騎兵科諸科の伝習を受けて、これを卒業、騎兵隊長となって200余名を統轄した。明治維新後は、東京本所相生町に設立された尺振八の共立学舎に英学を学んで、のち塾監に任ぜられた。共立学舎の創設は、明治3年(1870)7月と推定されている。同年9月、牧羊に関する建白書を提出、認められて民部省地理司権少佑准席を申し付けられ、翌4年2月、農事取調御用として3年間米国への派遣を命ぜられた。同年7月の民部省廃止にともない、翌8月大蔵省勸業少属、ついで勸農少属に任ぜられた。最初カリフォルニアの牧畜家の下で実地の研究を積んだが、明治4年(1871)12月、岩倉使節のサンフランシスコ到着にともない、大蔵省理事官に任命され、使節に同行することになった。ウシントンでは農務省で農政に関す

る調査に従事、さらにフィラデルフィアその他、各地の農事・牧畜を視察し、翌5年(1872)渡英、イングランド、スコットランドで農事・牧畜の視察・実地の研究に励んだ。研究を終えた岩山は、帰途米国で種牛、種羊、種子、農具などを買い入れ、明治6年8月帰国した。この間、5年10月には大蔵省勸農寮廃止にともない、同省租税少属に任ぜられている。帰国後は、内務省勸業寮設置にともない勸業権助、さらに内務少書記官、内務権大書記官、農商務権大書記官、製糸諮問会会頭、農商務省農務局長、農商務大書記官、駒場農学校長など農政実務の要職を歴任した。明治19年(1886)、元老院議員に任ぜられ、次いで宮崎・石川両県の知事を務めたが、石川県知事在職中の明治25年(1892)1月13日逝去した。正四位勲三等。享年54歳であった。

大蔵省理事官としての岩山敬義の欧米農業・農政に関する調査報告書が、『岩山敬義報告理事功程』であり、その中に収録された「英倫農業会社」こそがイギリス王室農業協会についてのわが国最初の紹介となった<sup>2)</sup>。

ところで、岩山敬義は単にイギリスの農会を紹介したのみでなく、実際に一つの農業結社を組織している。大日本農会の母体のひとつとなった東洋農会である。機関誌『東洋農会四季報告』の創刊号は、その冒頭に、岩山敬義の手になることが確実な「社言一章」という文章を掲げている。明治13年(1880)1月の日付が入った文章である。やや長文であるが、重要なものなので、一部省略して引用しておこう。なお、文中の傍点は黒丸が実際には白丸である以外は原文のままである。

曩キニ諸君下総牧羊場二在リシ時、皇国ニ未タ一農会ノ設立ナキヲ歎シ、俱ニ会同協議ヲ尽シ一会社ヲ組成セント謀リ、幸ニ客歳(明治12年、引用者)四月同処ニ於テ我東洋農会ヲ結了シ、而シテ松方勸農局長ノ讚称スル所トナリタリ。我輩此時ヲ以テ先ツ本会ノ播種ヲ終ヘタルトシテ、実ニ欣喜ニ勝ヘサリキ(中略)今茲、明治十三年一月ヲ以テ我輩初回ノ報告、即チ東洋農会

四季報告第一号ヲ発行シテ、之ヲ各地方ノ会員ニ配致スルノ榮ヲ得タレバ、乃チ我輩此時ヲ以テ復タ本会ノ発芽トシテ称揚セザル可カラス。(中略)而シテ、本会ハ于今官准ヲモ稟請セザル程ノモノニテ、固ヨリ堂々タル農業会社ニモアラサルハ、業ニ已ニ諸君ノ詳悉スル所タリト雖トモ、然レトモ本会ノ性質ニ就キテ論ズレバ、自今会員ノ僅小ナルニ拘ハラズ、皇国未曾有ノ農会ニテ、実ニ日本帝国農業会社ノ権輿タルト云フモ決シテ誣言ニアラサルト信ス。是、我輩ガ本会ヲ奨励スルニ勉焉シ、歇マザル所以ナリ。(中略)我輩、又會テ日耳曼ニ於テ農業ヲ奨励シテ、封建ノ余弊ヲ洗滌シ、同国農民ヲシテ開化ノ坤輿中幸福ノ地位ヲ取ラシメタルヲ視ルニ、千七百年代同国ノ一公国タル小拿搔ニ於テ小学校ノ学制ヲ変改シ、更ニ農事師範学校ヲ開設シ小学校ノ教員トナル可キ者ニ、理ニテ博物学ト農学ヲ教へ、現業ニテ種樹ノコトヲ授ケタルト、農業会社ヲ起シテ、或ハ農事報告ヲ頒行シ、或ハ各般ノ賞与法ヲ施行シタルトニ淵源セリ。(中略)嗚呼、我輩会員固ヨリ微力ナリト雖トモ、此等ノ事實ニ徴シ倍々農業上ノ学問経験ヲ切磋シ、皇国農事ヲ進歩スル機関ノ一タル我東洋農会ノ根柢ヲ培養シ、以テ本会ノ生長ヲ前ニシ有益ノ美菓ヲ結ハシムルコトヲ勉メサル可ケンヤ(東洋農会、1880: 1-3)

上記の引用文からも窺えるように、東洋農会は、欧米の農会(農業会社)を範として下総牧羊場の関係者、なかんずく牧羊生徒を中心に組織された。下総牧羊場は、大蔵省理事官として欧米での農業調査から帰国し、内務省勸業寮設置と同時に同寮権助に就任した岩山敬義がもっとも力を入れた事業であり、岩山自身、初代の下総牧羊場場長であった。下総牧羊場の開設は、明治8年(1875)5月ころから本格的に始動するが、早くも同年8月には牧羊生徒が府県から徴集され、伝習・教育が開始された。牧羊生徒は明治12年(1879)4月に3年間の学期を卒業し、卒業と同時に彼ら牧羊生徒と下総牧羊場在勤の農事篤志者によって創設されたのが東洋農会である(友田、2003a: 25-35;

2003b: 70-81)。

表1-1は、判明した限りでの東洋農会会員の一覧表である。おそらく、これ以外にも創設当初から会員であった牧羊場職員などがあると思われるが、資料的な限界から全貌を明らかにすることは困難である。ちなみに、『東洋農会四季報告』第4号の「告本会諸君」という文章には、同誌創刊以来「会員日ニ加リ今ヤ百有余名ノ多キニ至ル」(龍田、1880: 151)という言葉がみられる。東洋農会は牧羊生徒と下総牧羊場在勤の農事篤志者によって創設されたとは言っても、内務省勸農局の官僚はもちろん、府県の勸農関係官吏、農学校教員や農事試験場関係者、民間の牧場や農場経営者など、かなり幅広い層の会員を擁していたことがわかる。

東洋農会が結成された当時、すでに開農義会や津田仙の学農社といった農業結社は存在していた。しかし、開農義会は「専ら東閣の農書を繙きて良法を考案し船齋の農籍を閲して新術を摘訳し各自相示し苟も農家に裨益ありとなすもの八即ち敢て公問」(開農義会同盟、1875a: 表紙裏頁)することを、学農社もまた「泰西の農書を講究し普く本邦の農業を折衷し新法を適訳し良法を考案し世の農家の裨益を謀」(学農社、1876: 表紙裏頁)ることを目的として掲げていることからわかるように、もともと農書研究会的な形で発足した比較的狭い範囲の人々の結社であった<sup>3)</sup>。岩山敬義が、比較的広い階層を会員として擁した東洋農会をして「実ニ日本帝国農業会社ノ権輿」と呼んだ所以である。

東洋農会の機関誌について、故武田勉氏は「東洋農会は『明治農報』(12年8月に創刊)[中略]を随時発行していた」(武田、1960: 22)と述べている。たしかに『明治農報』という雑誌は存在する。しかし、それは明治30年(1897)に東京三田育種場から創刊された雑誌で、東洋農会の機関誌ではない。三田育種場は明治17年(1884)に大日本農会に委託され、19年に民間に払い下げられており、筆者の所蔵する明治45年(1912)秋季版の『明治農報』は完全に種苗の型録となっている。

表 1-1 東洋農会

		役員・牧羊生徒				
		明治13年(1880)現在の地位・職など				
氏名		氏名		氏名		
1	岩山 敬義	幹事	内務省勸農局権大書記官	60	アツブジョーンズ	客員
2	奥 青輔	副幹事	内務省勸農局御用掛准委任	61	藤崎 忠貞	定員
3	後藤 達三	録事	内務省勸農局三等属	62	志田 実	定員
4	龍田 退蔵	録事	牧羊生徒, 14年7月農商務省農務局九等属	63	恒田 弥	定員
5	波多野 尹政	(定員)	内務省勸農局三等属	64	土屋 拳直	定員
6	佐竹 義晴	(定員)	牧羊生徒, 13年中高知県産試験場兼務	65	折田 正介	不定員
7	安宅 寅之助	(定員)	牧羊生徒, 和歌山県十等属	66	樺山 莊輔	不定員
8	丹羽 任	(定員)	牧羊生徒, 茨城県勸業試験場か?	67	辻 正章	定員
9	飯島 一景	(定員)	牧羊生徒, 愛媛県十等属	68	宮岡 正吉	不定員
10	高橋 友吉	(定員)	牧羊生徒, 秋田県准十五等出仕	69	川合 執銀	不定員
11	福田 潔	(定員)	牧羊生徒, 岩手県外山牧場勤務か?	70	山口 辰二郎	不定員
12	玉井 駿吉	(定員)	牧羊生徒, 北海道開進社	71	樺山 吉次	不定員
13	長谷川藤二郎	(定員)	牧羊生徒, 三重県	72	新原 敏三	定員
14	木村 又三郎	(定員)	牧羊生徒, 「牛購求ノ為メ八丈島工渡航」(13年4月)	73	河井 貞一	定員
15	松井 監曹	(定員)	牧羊生徒, のち除名	74	塙 脩次	定員
16	田口 登荘	(定員)	牧羊生徒, 13年7月除名通知	75	湯村 千代治	定員
17	早水 済	(定員)	牧羊生徒, 愛媛県十等属	76	高野 周省	不定員
18	樺島 長一	(定員)	牧羊生徒, 福岡県准判任	77	本多 親基	定員
19	水澤 英盈	(定員)	牧羊生徒, 栃木県十等属	78	今泉 六郎	?
20	小川 正矩	(定員)	牧羊生徒, 島根県(松江)	79	直井 恒	不定員
21	中村 精一	(定員)	牧羊生徒, 13年中鬼崎と改姓, 14年長崎県御用掛准判任	80	桂 弥一	定員
22	樺山 市兵衛	(定員?)	牧羊生徒	81	久光 軍太	定員
23	脇山 敬興	(定員)	牧羊生徒, 神奈川県	82	村井 半之助	定員
24	高井 勉	(定員)	牧羊生徒, 13年中高知県御用掛	83	大野 優蔵	定員
25	豊島 茂一	(定員?)	牧羊生徒	84	平野 友章	定員
26	竹島 勇之助	(定員)	牧羊生徒, 兵庫県	85	糟屋 音安	定員
27	吉田 確造	(定員)	牧羊生徒, 吉田儀軌か? 栃木県御用掛准判任	86	伊集院 兼孝	定員
28	小野 戒三	(定員)	牧羊生徒, 福岡県准判任	87	鈴木 誠一	定員
29	田村 正寛	(定員)	牧羊生徒, 滋賀県九等属			
30	羽田 明忠	(定員)	牧羊生徒, のち除名			
31	西大條胞二郎	(定員)	牧羊生徒, 宮城県			
32	野坂 慶之助	(定員)	牧羊生徒, 広島県農事講習所助教			
33	谷 翠	(定員)	牧羊生徒, 大分県御用掛准判任			
34	河合 美清	(定員)	牧羊生徒, 13年1月現在・在下総牧羊場			
35	望月 唯衛	(定員)	牧羊生徒, 石川県, 13年7月辞職して北海道へ赴くの通知			
36	太田 真琴	(定員)	牧羊生徒, 13年1月現在・在下総牧羊場			
37	加納 正治	(定員)	牧羊生徒, 千葉県御用掛准判任			
38	齋藤 十郎	(定員)	牧羊生徒, 石川県			
39	矢内 俊夫	(定員)	牧羊生徒, 兵庫県御用掛准判任			
40	原 六郎	(定員)	牧羊生徒, 福島県御用掛准判任			
41	鹿野 肇三郎	(定員)	牧羊生徒, 長野県十等属			
42	小野田新五郎	(定員)	牧羊生徒, 13年2月下総牧羊場雇			
43	岸 伸吉	(定員)	牧羊生徒, 堺県, 「牛購求ノ為メ八丈島工渡航」(13年4月)のち除名			
44	木野 源六	(定員)	牧羊生徒, 福島県御用掛准判任			
45	花岡 猛男	(定員)	牧羊生徒, 長野県十等属			
46	後藤 良助	(定員)	牧羊生徒			
47	渡辺 喜久治	(定員)	牧羊生徒			
48	小池 光謙	(定員)	牧羊生徒, 静岡県, 14年静岡県十六等出仕			
49	田村 志雄	(定員)	牧羊生徒			
50	長崎 壹太郎	(定員)	牧羊生徒			
51	沢堅 龍太郎	(定員)	牧羊生徒			
52	松波 幸三郎	(定員)	牧羊生徒, 石川県農事講習所掛員(13年9月まで)			
53	砂川 清瀬	(定員)	牧羊生徒			
54	黒瀬 太郎	(定員)	牧羊生徒			
55	相原 竹雄	(定員)	牧羊生徒, 15年2月山梨県農事講習所三等助教諭			
56	内村 健次	(定員)	牧羊生徒, 鳥取県			
57	江藤 勇	(定員)	牧羊生徒			
58	東 彦四郎	(定員)	牧羊生徒			
59	狩野 安久	(定員)	牧羊生徒			

(出所)『東洋農会四季報告』各号から筆者作成。「明治13年(1880)現在の地位・職など」は、彦根正三編(1880)『改正 官員録

会員名簿

下総牧羊場職員など関係者	その他の人々		
	氏名		明治13年(1880)現在の地位・職など
明治13年(1880)現在の地位・職など			
元下総牧羊場	88 海部 忠蔵	不定員	高知
内務省勤農局六等属, 下総種畜場職員	89 堤 幹己	不定員	高知, 13年10月徳島県九等属
下総牧羊場農具製作人	90 松平 正直	不定員	宮城県令
内務省勤農局三等属, 12年12月まで下総牧羊場職員	91 鳥居 義處	不定員	長野県北佐久郡長
内務省勤農局七等属, 華族, 従五位, 当時下総種畜場居住	92 宇井 忠	定員	千葉県島村戸長
内務省勤農局五等属, 下総種畜場職員	93 進藤 章三	定員	福島県御用掛准判任
内務省勤農局八等属, 下総種畜場職員	94 安井 好尚	不定員	島根県
内務省勤農局七等属, 下総種畜場職員	95 肥田 照作	?	第十五銀行支配人
内務省勤農局五等属, 下総種畜場職員	96 田代 脩敬	定員	北海道開進社東京深川材木町分局役員
内務省勤農局四等属, 下総種畜場職員	97 桑嶋 景連	?	陸軍馬医官
内務省勤農局六等属, 下総種畜場職員	98 藤江 卓蔵	不定員	千葉県五等属(勤業課), 『実用殖産新書』(M20)
在下総牧羊場	99 堤 莊蔵	不定員	福岡県七等属, 福岡県農学校
内務省勤農局雇, 下総種畜場職員	100 爾 師応	不定員	福岡県農学校
内務省勤農局七等属, 下総種畜場職員	101 伊東 喜東太	定員	千葉県
14年農商務省農務局御用掛准判任, 下総種畜場職員	102 新田 半人	定員	新潟農事試験場事務, 新潟県農商課
在下総種畜場, 宮城県	103 田村 半吾	定員	新潟農事試験場事務
在下総種畜場, 新潟県	104 小川 弘水	不定員	秋田県五等属(勤業課長)
牧羊生徒, 長崎県雲仙で牧羊経営	105 加藤 懋	定員	兵庫県御用掛准判任(勤業課)
在下総種畜場, 陸軍馬医生	106 岡 毅	定員	内務省勤農局一等属
内務省勤農局七等属兼千葉県七等属	107 宮里 正静	定員	内務省勤農局六等属
14年内務省勤農局九等属	108 津田 出	定員	東京議官
内務省勤農局御用掛	109 古谷 雄吉	定員	内務省勤農局五等属
在下総種畜場, 獣医生, 福島県	110 岩山 直隆	定員	内務省勤農局雇
下総種畜場場員	111 新山 莊輔	定員	内務省勤農局陸産課獣医掛, 14年農商務省農務局御用掛准判任
下総種畜場場員	112 三浦 清吉	定員	内務省勤農局陸産課獣医掛
下総種畜場場員, 雇	113 羽生 熙氏	不定員	秋田県
下総種畜場場員	114 牧野 勘平	定員	石川県
下総種畜場場員, 雇	115 立岩 一郎	不定員	福島県一等属, 桑野村開拓科出張所在勤
	116 新谷 英太郎	不定員	岡山県
	117 古賀 勇	不定員	長崎県
	118 早田 丈太郎	不定員	長崎県
	119 牛村 一氏	?	福島県・郡山農学校教員, 駒場農学校農学科卒業
	120 松方 正義	不定員	内務卿
	121 品川 弥二郎	不定員	内務少輔
	122 船越 衛	不定員	千葉県令
	123 森田 龍太郎	不定員	千葉県御用掛
	124 中村 衡平	不定員	千葉県御用掛准判任(勤業課長)
	125 服部 五十二	不定員	内務省勤農局一等属(新町紡績所長)
	126 鳴門 義民	定員	内務省勤農局五等属(陸産課)
	127 浅井 義重	定員	内務省勤農局五等属(陸産課)
	128 種子島 時中	定員	14年農商務省書記局御用掛准判任(内務省勤農局御用掛)
	129 福羽 逸人	定員	内務省勤農局御用掛准判任(播州葡萄園担当)
	130 森永 澤	定員	内務省勤農局陸産課雇
	131 横瀬 文彦	不定員	兵庫県御用掛准判任(兵庫県綿糸製造所長)
	132 広澤 安任	不定員	広沢牧場経営
	133 石川 須磨	不定員	山形県十五等出仕
	134 加藤 駒太郎	不定員	秋田県七等属
	135 関 易太郎	不定員	秋田県秋成社役員
	136 畜産会社	不定員	愛媛県
	137 伊藤 栄太郎	定員	愛媛県
	138 小澤 温吉	定員	陸軍馬医生
	139 宮内 又兵衛	不定員	茨城県弘農社員
	140 大野 弘三郎	不定員	千葉県開墾会社役員
	141 穴山 篤太郎	不定員	東京書肆, 有隣堂主人

(明治十三年十月版)』博公書院その他の資料によった。



東洋農会の機関誌は、『東洋農会四季報告』である。明治13年(1880)1月に第1号が刊行され、翌14年1月の第5号までの継続が確認できる。各号の巻頭には「社言一章」という論説が掲載されており、次いで目次、本文、社告等となっている。第1号の「社言一章」は上に一部を引用したように、とくにタイトルはつけられていないが、第2号の「社言一章」には「農業ノ進就ヲ論ス」、第3号には「獣医術貴重ス可キノ論」、第4号には「牧羊ハ急務タル可シ」、第5号には「農器ノ改良ヲ論ス」とそれぞれタイトルがつけられており、また第2号の「社言一章」のあとには、岩山敬義の「開墾起業ノ考案」が掲載されている。『東洋農会四季報告』の目次については、紙数の関係で省略する。結論だけを述べれば、畜産関係の論説が相対的に多いのは当然であるが、全体とすればその主題はかなり多岐にわたっている。また、寄稿者は圧倒的に牧羊生徒が多く、下総種畜場職員がこれに次いでいるが、その数は多いとは言えない。録事(役員の名称)でもある後藤達三がやや目立つ程度である。牧羊場関係者以外の人物は進藤章三や爾師応などごく少数に止まっている。

しかし、上に挙げた「告本会諸君」に「本会ハ毎年四回ノ報告ヲ以テ満足スルニ非ス漸次会員ヲ増殖シ広ク我邦農況ヲ明シ彼長ヲ取り我短ヲ補ヒ我邦ノ富基ヲシテ益々鞏固動カサラシムルニ在ル」(龍田, 1880: 151)とあるように、将来的には下総牧羊場関係者以外からの寄稿を増やしていこうとする方向にあったことが理解できる。さらに付言すれば、東洋農会の副幹事であった奥青輔は、「北亜合衆国加里福尼州立農事会社條例・同州立会社二関スル諸法令ノ附言」において、「我国早晚大農会社ヲ成立シ広ク内外ノ実験ヲ採収シ治ク知識ヲ交換シ有志者各応分ノ義務ヲ尽シ民心ヲ奨励誘導シテ国家ノ実益ヲ挙ケ而富強ノ基礎ヲ鞏固ナラシメサル可カラズ」(奥, 1880: 32)と述べており、当面は下総牧羊場関係者を中心としつつも、最終目標は全国的な規模での「大農会社」の設立にあったことが看取できる。

### Ⅲ. 三田育種場と東京談農会

東洋農会と並んで大日本農会の母体となったのは、東京談農会である。この東京談農会について、大日本農会の創立委員の一人であり、また初代幹事の一人でもあった池田謙蔵は、後年、次のように回想している。

(前略) 抑本会の創設は明治十四年四月にありといへとも、其源は遠く明治の初年に発したるものなり。故大久保利通公欧米御巡視のときより、本邦に一大農会を開き大に農家を益するの具となさるゝの思食なりし由、予て聞く所なりしが、明治七年旧三田育種場の地を内務省に購入せられ、同十年に至り同地を開墾し曩て育種場を置かれ、漸次農会等の設立に至るべき筈なりしも、十一年五月不幸にして公は兇徒の毒手に倒れさせられ、竟に其機会に達せず、遺憾も亦究まれりと云ふへし。然るに翌十二年五月卑生育種場長の命を蒙りたるにより、是非此地に於て一大農会を開き、公が遺志に従はんことを望みしも、奈何せん位置もなく学識もなきを以て空しく日月を経過せしに、同年の冬小澤善平氏来り告げていはく、十三年春期種子交換市に際し、地方より出京の老農等と懇親会を開き、知識交換の事をなさんと欲す、宜しく斡旋すへしと。因りて之を一時的の会に止めず、他日一大農会を設立するの雛子となさんことを談し、竟に東京談農会を開くに至れり。[以下略](池田, 1889: 5)

これによれば、東京談農会の創設に際しては小澤善平と池田謙蔵自身とがきわめて重要な役割を果たしたことが看取できる。そこで小澤善平の手記をみると、「(明治12年)六月共同農事会ナルモノヲ造 谷本, 正木, 大西, ノ三者ヲ発起人 余カ宅ニ毎水曜日十二時ヲ期開会シ農事ノ講話ナセリ 当時働農儀会及農業雑誌等ノ発刊アルノミニテ談話会ナルモノ曾テ日本國ニアルヲ聞サルノ時ナリ/同拾三年(中略)共同農事会ハ思ウ程振ハス依テ三田育種場長池田謙蔵氏農事必要ナル事ヲ以テ謀シカ 氏又大ヒ二賛成アリ 氏ノ官宅集 一

夜ノ談話ノ結果談農会ナルモノヲ造リ 農商務省ノ役員一同ノ賛成ニテ 報告書即雜記第一回ヲ発スルヲ得タ」(足立, 1997: 5-6)とある。「働農儀会」とはおそらく開農義会の誤りであろう。また「農業雑誌」とは津田仙の学農社『農業雑誌』, さらに「報告書即雜記第一回」とは後述の『農談雜記』である。

明治12年(1879)6月に小澤善平の主唱で、谷本・正木・大西を發起人として「共同農事会」をつくったのがそもそもの始まりだといえる。小澤善平は、言うまでもなく下谷区清水町で「撰種園」を営んでいた著名な苗木販売業者である<sup>4)</sup>。谷本は谷本清兵衛で、『府県老農名簿』によれば浅草区浅草永住町で種子販売業を営んでいた(農商務省農務局, 1882: 4)<sup>5)</sup>。また正木は正木葛であるが、どのような人物かは明らかでない。さらに大西という人物は東京談農会の会員名簿に名前がない。ちなみ『府県老農名簿』には大西三次郎(南葛飾郡西小松川村)という名前がある。種苗販売業者らが小澤の家に定期的に集まって農事の講話をしたのが「共同農事会」であった。しかし、この会も思うほど振るわなかったために、三田育種場長であった池田謙蔵に相談し、その賛成を得て東京談農会が結成されることになったというのが小澤の記述である。

この記述だけを見れば、東京談農会の発案者は小澤善平ということになるが、池田謙蔵自身もこれにつながるような発想はすでにあったのである。上に引用した池田の「十二年五月卑生育種場長の命を蒙りたるにより、是非此地に於て一大農会を開き、公が遺志に従はんことを望みしも、奈何せん位置もなく学識もなきを以て空しく日月を経過」という言葉がこれを示している。さらにその裏付けになる資料に、明治12年(1879)7月付けの三等属池田謙蔵「種子交換市場建増之義二付伺」がある。

良種ヲ精選シ内国植物ノ改良ヲ図ルハ当场ノ主眼ニ有之候処昨春以来東京府ヲ始メ近隣ノ県々共申合春夏両度ツツ各管内著名ノ種子ヲ持寄り互ニ交換試植ノ義着手候処追々相加リ候県々不

少就テハ今一層盛大ニ致シ各府県トモ一ヶ年一度ツツ集合種子交換及ヒ前期交換種子ノ結果報告ト併セテ管内農業上ニ関スル事件八互ヒニ質疑討論致シ候ハ頗ル裨益不少義ト集合ノ県官共希望致候へ共在来市場ニテハ何分施行難致然ル処来明治十三年春当场ニ於テ穀類共進会御開設ノ御内議有之実ニ好機會ノ事ニ有之候へハ当時在来ノ分八更ニ別紙函面ノ通御建増相成候様致度尤平日八旧試験場ヨリ引継相成候農産物ヲ始メ漸次各地ノ農産ヲ採集陳列シ其良否ヲシテ一日ニ瞭然ナラシメ候トキハ農家ヲ勧誘シ改良ヲ図ルニ緊要ノ事件ト思考致候 [以下略] (農林省農務局, 1939: 155)

すなわち年1回各府県から持ち寄った種子の交換会を開催し、その際に前年交換した種子の試植結果の報告と、「管内農業上ニ関スル事件」について質疑討論を行うという構想である。これは農会というよりは農談会であるが、池田自身は「之を一時の会に止めず、他日一大農会を設立するの難子となさんことを談し、竟に東京談農会を開くに至れり」と述べているように、単に農談会に止まらず、これを農会にまで発展させたいという考えがあったことが看取できる。いずれにせよ、小澤善平らによって始められた既存の「共同農事会」と、池田謙蔵の構想とが上手く結びついたまです初の成果が東京談農会であったとすべきであろう。ここで池田謙蔵の経歴について注記しておこう。

・池田謙蔵(いけだ けんぞう: 1844-1922)

弘化元年(1844)11月20日、松山藩士池田伴寛の長男として伊予国温泉郡式番町(現松山市)に生まれた。明治4年(1871)春に渡米、農業・園芸について調査した。この渡航時に横浜からサンフランシスコまで道連れとなったのが、後に勸業寮の上司となる岩山敬義であった(池田, 1915: 11-12)。ちなみに島地黙雷の記録によれば、池田の渡航年月は「辛未ニ」月で、このときの肩書きは「松山旧権少属」であった(二葉・福島, 1973: 113)。明治5年(1872)末、岩山敬義がワシントンを訪れ、岩

倉使節団理事官として渡欧する話をきき、イギリスまで同行することとし、渡英して農業・園芸についての調査を行った。植物種子数種を購入し、フランスのパリを経て、明治6年(1873)1月に帰国、愛媛県庁に奉職、聴訴課に勤務した。明治8年(1875)、内務省勸業寮に出仕、「内藤新宿にある第四課の樹芸課」に勤務、やがて下総牧羊場開墾用の諸機械の製造を命ぜられた。明治9年(1876)、フィラデルフィア万国博覧会に審査官として出張、審査終了後、3か月間にわたって米国農業地視察を行い、農業器械の標本を購入し、桃の缶詰の製造技術なども学んだ。米国から帰国後、明治12年(1879)三田育種場長に任命され、また同場に移管された農具製作所長をも兼任した。明治20年(1887)廃官となり官を辞したが、その後も自らが創設に尽力した大日本農会の常置議員、幹事、特選幹事、参事など要職を歴任し、明治27年(1894)には同会から紫白綬有効章を授与されて名誉会員にあげられ、明治29年(1896)には藍綬褒賞を下賜された。また、明治40年(1907)9月、大日本皇道会を組織し、小柳津勝五郎の天理農法の普及に尽力している(実業之世界社編、1913:57)<sup>6)</sup>。大正11年(1922)2月21日、東京芝三田綱町の自宅で逝去した。享年79歳であった。

小澤善平は明治13年(1880)とし、池田謙蔵は同12年の冬としているが、小澤は池田に「十三年春期種子交換市に際し、地方より出京の老農等と懇親会を開き、知識交換の事をなさんと欲す、宜しく斡旋すへし」(池田、1889:5)と依頼した。この種子交換市については、「本年春会ニ来会スルモノ二十余県ノ多キニ至」り、「来会者ノ所見ニテハ一ヶ年両度ノ開会ハ實際ニ適セス寧ろ春季一回ト更メ将来ハ該会ニ於テ前年交換セル種子ノ結果如何ノ報道其他農事ノ景況ヲモ談話シ互ニ質問切磋候様相成候ハ、勸農上裨益少ナカラサルヘシトノ企望」(農林省農務局、1939:367)であったとの記録がある。これは池田が上の「種子交換市場建増之義ニ付伺」で述べていることとそっくり同じで

ある。いずれにせよ、このときに農談会が開催され、東京談農会が設立されたのであろうことは、同13年3月付けの「東京談農会設立趣旨」が遺されていることからわかる。

明治維新ノ徳沢ニ浴シ百芸日進ノ聖代ニ遭ヒ吾農業ノ如キモ之ヲ學術実地ニ就テ講究スルモノ日一日ヨリ多ク大ニ望ミヲ後来ニ囑スヘキ処アリ然リト雖モ如何セン日尚浅キヲ以テ其業未タ全然改進ノ域ニ至ラス加之土族商売ヨリ転業スルノ輩ハ率ネ実地ノ経験ニ昧ク世襲ノ農者ハ専ラ旧慣ヲ改ムルヲ知ラスコレ畜ニ此業ノ進歩ヲ阻滞スルノミナラス却テ自家ノ損失ヲ速クニ至ルヘシ是ニ於テ乎吾輩有志ノ諸君ヲ会シテ談農会ヲ東京ニ開キ各家確實経験ノ説ヲ求メ此業ノ改良進歩ヲ謀リ以テ聊カ愛國ノ微衷ヲ表スル所アラントス伏シテ乞フ有志ノ諸君来会シテ各其所見ヲ吐露シテ共ニ農業進歩ノ道ヲ講スルアラントコトヲ(農林省農務局、1939:156)

これによれば、東京談農会は農会ではなく、まさに農談会であったことがわかる。さらに同年12月に改正の会則を見ると、この点はより一層明らかである。すなわち、その第1條は「会日ハ毎月第一日曜日午前九時集会午後二時散会ノコト」、第2條は「会場ハ芝区三田四国町勸農局育種場内ヲ拝借シ仮集会所ト定メ置クト雖トモ若シ差支アルトキハ他所ニ於テ開設スヘキコト」と規定されており、やっと第3條に「役員ハ会頭一名(括弧内略)幹事三名編輯員二名会計員二名審査員八名ヲ置キ一切ノ会務ヲ弁理スヘキコト」(農林省農務局、1939:156-157)という農会らしい規程があるからである。第1條と第2條は農会というよりも農談会の規程にこそふさわしいものである。

ところで、上に示した「東京談農会設立趣旨」と東京談農会の「会則」はいずれも明治14年(1881)1月6日付けの大石卓郎「育種場開市ノ規則ニ随ヒ場内拝借ノ義ニ付願一東京談農会」に収録されているものであるが、そこに収録されたもう一つの文書、勸農局育種場宛て「談農会ノ義ニ付願」は、「東京談農会員総代/小澤善平、萩原友賢」の名で提出されている。萩原友賢とはどのよ



うな人物なのであろうか。明治13年(1880)10月版の『官員録』によれば内務省駅通局一等属、翌明治14年(1881)7月版の『官員録』では農商務省工務局一等属上等・駅通局一等属で、出身は山梨となっている。勤農当局への願書が勤農官僚の名では不都合なため、小澤と同郷で、しかも一等属という比較的影響力のある官僚であるところから萩原が総代に名を連ねたのであろう。

小澤善平は上記の手記で、東京談農会を創設したあと、「農商務省ノ役員一同ノ賛成ニテ 報告書即雑記第一回ヲ発スルヲ得タ」と述べていた。ところが一般には、東京談農会は機関誌として『東京談農会報告』を発行したという説が流布している。例えば藤井隆至・滝沢秀樹氏は、「東京の三田育種場内で作られた東京談農会は、1880(明治13)年の7月に『東京談農会報告』を刊行したという」(藤井・滝沢, 1990:130)と伝聞の形で記している。その記述のあとには「(『帝国農会史稿』による)」と記されているので、次に『帝国農会史稿記述編』をひもとくと、綿谷赳夫氏の筆になる第1章第1節「系統農会への源流」では「東京談農会は『東京談農会報告』という雑誌を随時発行していた」(帝国農会史稿編纂会, 1972:28)となっている。この記述の出所は明記されていないが、東洋農会の機関誌を『明治農報』であるとした武田勉氏の論文であることは明らかである。すなわち武田氏は「東京談農会は『東京談農会報告』(13年7月に創刊)[中略]を随時発行していた」(武田, 1960:22)と述べているのである。これがすべての出発点であるが、その認識は『明治農報』の場合と同じく誤りである。東京談農会の『農談雑記』第一篇という冊子が現存するからである。

『農談雑記』第一篇(東京談農会)は、静岡県土族竹尾忠男を編輯人、静岡県土族曲直瀬愛を出版人とし、有隣堂(穴山篤太郎)から明治14年(1881)3月に刊行された。同年2月付けのその「緒言」では、「客歳某月日同志拾数名始メテ三田育種場内第一号官舎ニ集リ談農会ヲ開キシヨリ各月一次相会シテ談話スル所ノモノ或ハ各自ノ実験ニ出テ或ハ有識ノ論説ニ涉リ互ニ智識ヲ交換シテ其裨益ス

ル所少小ナラス是ニ於テ其談ヲ編次シ名ケテ農談雑記トシ以テ会員ニ報シ併セテ世ノ同好諸君ニ告ク」(東京談農会, 1881:緒言)と述べている。すなわち、機関誌というよりは農談会の記録ないし報告書と呼んだ方が妥当である。目次は以下の通りである。

- 法蘭西滞在中の話 内山平八 述
- 故蘿蔔試植の景況 山梨県下甲斐国東八代郡祝村 高野積成 報
- 葡萄の黴 正木 葛 述
- 「フヰロキセラ」虫蠶の根にの説 曲直瀬愛 記
- 法蘭西、以太利葡萄栽培場の地形並に土質 内山平八 述
- 紅蘿蔔の選種法 内山平八 述
- 葱の説 奥津萬吉 述
- 麦の選種法附種付並に裁種の積蓋比較 内山平八 述
- 胡瓜茄子苗床の説 奥津萬吉 述
- 不熟蕃椒の栽培法 奥津萬吉述・正木葛記

次に編輯人と出版人、および執筆者について見ておこう。上記小澤善平の手記には「農商務省ノ役員一同ノ賛成ニテ 報告書即雑記第一回ヲ発スルヲ得タ」とあるが、編輯人の竹尾忠男と出版人の曲直瀬愛は、いずれも出版当時は内務省勤農局、のち農商務省の官僚であった。まず、竹尾忠男は嘉永4年(1851)幕臣竹尾忠礼の子として生まれた。のち静岡藩家祿9石(5人扶持)となり、明治2年(1869)静岡学問所の五等教授に就任し漢学を教えたが、同5年(1872)東京大学東校で英学を修業し、同7年(1874)まで静岡鷹匠町3丁目95に居住した。明治10年(1877)内務省勤農局七等属に任ぜられ、翌11年(1878)内国勸業博覧会事務局勤務となった。『農談雑記』刊行時は内務省勤農局六等属で、明治14年(1881)農商務省の創設とともに農務局六等属に任ぜられた。明治18年(1885)農商務省三等属。のち日本基督公会執事となり、大正10年(1921)に没している<sup>7)</sup>。

出版人であつた執筆者のひとりでもある曲直瀬愛については、明治13年(1880)以前の経歴は不明である。しかし、「曲直瀬はマナセと読ませるなど特殊な姓である。またこの姓は曲直瀬道三以前に

なく、道三が初めて使用したと考えられている」(真柳・矢数, 1991: 93) というから、戦国・安土桃山時代の著名な医家曲直瀬道三の系譜を引くのであろうか。曲直瀬姓は代々医家の家系で、幕末には曲直瀬篁庵が医家・本草家として活躍している。曲直瀬は編輯人の竹尾忠男と同じく静岡県土族であり、その名が『官員録』に登場するのは、管見の限りでは明治13年(1880)からである。すなわち、この年、内務省勸農局御用掛准判任として曲直瀬の名が見られるが、すでにその前年の明治12年に刊行された内国勸業博覧会事務局発行の『明治十年内国勸業博覧会列品訳名』は曲直瀬愛等編となっているので、これ以前から雇等として官辺にあった可能性もある。明治14年(1881)から同18年まで農商務省農務局御用掛准判任を勤め、明治19年(1886)に農商務省農務局五等属となった。同年12月改正『職員録』の農商務省には曲直瀬の名は見られない。農務局在職中の明治16年(1883)には『採蟲指南』を有隣堂から刊行しており、さらに明治20年(1887)にも『日本柑橘品彙図解』を公にしている。島田豊纂訳『和訳英字彙 附音插図』(1888)、田中芳男・小野職愨撰『有用植物図説』(1891)の校訂なども行っている。いずれにせよ、竹尾も曲直瀬も静岡土族なので、旧幕臣のテクノクラートである可能性が大きい。旧幕臣が近代移行期において実務官僚として果たした役割がきわめて大きなものであったことは周知の通りである。

『農談雑記』の執筆者は内山平八・奥津萬吉・正木葛・高野積成および曲直瀬愛の5人である。中でも内山平八は4本と最も多くの論説を発表している。当時、三田育種場の場員であった片寄峻の回想によれば、「池田(謙蔵)場長の下には曲直瀬愛、出井静、大石卓郎、福羽逸人の諸氏が居て一切場務を分担し農芸の実地に付ては内山平八氏が之れに当」(片寄, 1931: 35-36) っていたという人物である。もと植木屋で、当時の身分は三田育種場の雇であったが、その経歴についてはあまり明らかでない。ただし、『農談雑記』の巻頭に載っている「法蘭西滞在中の話」では、自ら次のよう

記している。

明治十年万国博覧会事務局に随行して法蘭西巴里府に至り翌年葡萄樹の剪條法を学んが為め巴勒府の東南なるトロウ地方に赴き著名の植物栽培家パルティの許に廿六日間逗留したり(中略)同年四月末巴勒府に帰り同年七月再びトロウに行きて葡萄樹の冗條を剪除する法を学ひ十月頃又行きて葡萄収入の景況を目撃せり(中略)博覧会閉場の後菓木接換法穀菜栽培及び選種法等研究の為め十一年十一月頃プーラレンのジャーマンに就きて菓木接換の法を学ひ又土曜日毎に巴勒府の種苗商ビルモランか許に到り現業に従事し始めて宿志を達するを得たり(内山, 1881: 1-3)

これによって、明治11年(1878)のパリ万国博覧会の際に渡仏し、農芸の実地について学んだことがわかる。内山は博覧会事務局である「前田(正名)ら先発組とタイナス号で渡仏(M10.10.9)」し、パリ万国博覧会では「博覧会場内日本式庭園造成」の用務を勤めた(岩壁, 1985: 103)。ちなみにこのとき、土屋助次郎(竜憲)・高野正誠もともに前田正名に従って渡仏し、ブドウ栽培やワイン醸造について学んでいる(祖田, 1973: 64)<sup>8)</sup>。フランスから帰国後の内山については、『明治前期勸農事蹟輯録』や『農務顛末』などにわずかにその名が登場する。例えば後者収録の「明治十四年小麦移植法并二選種ノ試験」では「右ノ(小麦)移植法八局員内山平八カ曾テ仏国有名ノ種子商ビルモラン氏ヨリ伝習セシ新法」(農務局, 1957: 66) であるとしている。その後の内山平八について記録上で明らかになるのは明治19年(1886)である。すなわち同年7月23日、内山は東京農林学校訓導に任ぜられている。さらに明治23年(1890)に東京農林学校が帝国大学農科大学となると同校書記、明治25年(1892)には帝国大学農科大学技手、そして明治27年(1894)には帝国大学農科大学助手となっているが、その後については不詳である<sup>9)</sup>。

このように小澤善平と内山平八は、いずれもブドウと関係が深い人物であった。そして『農談雑記』の執筆者のひとり高野積成もまた山梨県のブ

表 1-2 東京談農会会員名簿 (明治 14 年 2 月現在)

氏名	備考	氏名	備考
1 池田 謙蔵	東京 勸農局一等属	33 辻村 清善	東京 勸農局一等属
2 出井 静	東京 勸農局七等属	34 南部 義篤	東京 北巨摩郡円野村 (老), 農産社, 酒造業, 県会議員
3 出口 作	東京 勸農局四等属	35 内藤 朝政	山梨 横浜
4 石渡 正敏	東京 勸農局四等属	36 植木屋小一郎	東京 本文参照
5 今井太郎兵衛	東京 土木局長, 大書記官	37 海野 信幸	東京 逸摩郡大國村 (老)
6 石井 省一郎	東京 老農, M14 秋田県七等属	38 内山 平八	東京 福島県五等属
7 石川理紀之助	秋田 老農, M14 秋田県七等属	39 安井 好尚	東京 勸農局三等属
8 泉 猪太郎	東京 勸農局六等属	40 矢部 重高	東京 勸農局御用掛准判任
9 飯田 孝次	東京 勸農局六等属	41 山田 敬三	東京 三重 勸農局御用掛准判任
10 橋本 浩吉	東京 駅通局一等属	42 曲直瀬 愛	東京 三重 勸農局御用掛准判任
11 萩原 友賢	東京 勸農局六等属	43 正木 葛	東京 南豊島郡内藤新宿北町 (老), 静里園主
12 西尾 篤	東京 勸農局六等属	44 福川 重常	東京 三重 勸農局御用掛准判任
13 星野 與逸	東京 勸農局六等属	45 福羽 逸人	東京 石川 勸農局御用掛准判任
14 堀田 三太郎	広島 勸農局一等属	46 藤井 秀正	東京 南豊島郡内藤新宿北町 (老), 静里園主
15 岡 毅	東京 勸農局一等属	47 藤井 徹	東京 南豊島郡内藤新宿北町 (老), 静里園主
16 大内 宣誉	東京 下谷区清水町 (老)	48 古井底 謙	東京 南豊島郡内藤新宿北町 (老), 静里園主
17 小澤 善平	東京 勸農局八等属	49 小柴 洋一	東京 山口 勸農局三等属
18 大石 卓郎	東京 勸農局八等属	50 小林 省三	東京 山口 最上郡中渡村 (老)
19 大槻 吉直	東京 勸農局一等属	51 遠藤 貞一郎	山口 勸農局三等属
20 大越 亨	石川 石川県八等出仕	52 荒木伊左衛門	山形 最上郡中渡村 (老)
21 大草 孝暢	東京 M14 農商務省農務局御用掛准判任	53 穴山 篤太郎	東京 書肆有隣堂主人
22 薬品 槍太郎	東京 M14 農商務省農務局御用掛准判任	54 荒川 左兵衛	山口 東八代郡祝村 (老)
23 若林 高久	東京 M14 農商務省農務局御用掛准判任	55 雨宮 彦兵衛	山梨 東八代郡祝村 (老)
24 加藤 次次郎	東京 下谷区下谷北福荷町 (老)	56 佐々木 綱良	東京 東八代郡祝村 (老)
25 川田 利八	東京 M10-12 仏国留学, 葡萄酒製造法等を学ぶ	57 宮村 朔三	東京 東八代郡祝村 (老)
26 高野 正誠	山梨 M10-12 仏国留学, 葡萄酒製造法等を学ぶ	58 宮村 撃	東京 東八代郡祝村 (老)
27 田井 正一	東京 M13.6 駒場農学校農学科卒	60 十文字 信介	広島 広島県二等属
28 高橋 昌	東京 M13.6 駒場農学校農学科卒	61 篠田 敏三郎	東京 勸農局三等属
29 竹内 太郎	東京 勸農局九等属	62 樋田 魯一	東京 勸農局三等属
30 高木 怡荘	東京 浅草区浅草永住町 (老), 種苗商, 商号丸藤	63 森澤 永	岩手 内務省勸農局雇 (陸産課), 岩手県十五等出仕 (M15)
31 谷本 清兵衛	東京 浅草区浅草永住町 (老), 種苗商, 商号丸藤	64 瀬崎 源八	東京 内務省勸農局雇 (陸産課), 岩手県十五等出仕 (M15)
32 竹尾 忠男	東京 勸農局六等属	65 杉山 新十郎	広島 広島県五等属
33 高野 積成	東京 東八代郡祝村 (老)		

(出所) 東京談農会 (1881) 『農談雑記』 第 1 篇, 農商務省農務局 (1882) 『府県老農名簿』, 彦根正三編 (1880) 『改正 官員録』 博公書院などから筆者作成。

ドウやワインの発達にとって忘れることができない人物である。高野積成は弘化 3 年 (1846) 2 月 16 日、甲斐国勝沼の下岩崎に生まれた。早くからブドウ栽培の専門家としてその名を知られていたが、慶応 2 年 (1866) からは蚕種製造にも手を染め、明治 7 年 (1874) には 36 人繰りの製糸工場を郡内で初めて完成させた。明治 10 年 (1877) 祝村葡萄酒醸造会社の設立にあたってはその株主となり、さらに明治 13 年 (1880) 9 月には、「農業養蚕ノ会議ヲ開キ広ク物産ヲ殖盛ナサン事ヲ謀リ」興業社を起こして社長となり、その後も山梨県におけるブドウ栽培の発展やブドウ酒醸造の改良に尽力した (上野, 1977: 144-147)。『農談雑記』の執筆者には、他に奥津萬吉と正木葛がいるが、その経歴等については不詳である。なお、東京談農会の

会員については表 1-2 に示した。

本節の最後に、三田育種場の創設者で初代場長となった前田正名と東京談農会との関係について考える上で興味深い資料を挙げておこう。明治 10 年 (1877) 9 月の『三田育種場農産会市ノ順序』である。その一節に「畢竟此会 (農産会) 八農業上ノ各種ヲ勸奨誘導スルカ為ニシテ漸次其業ノ盛ナルニ随ヒ欧洲各地ノ如ク諸府県下ニ農業会社ノ自カラ成立如キコトアラハ之ヲ鼓舞振作スルハ其会社ノ責任タルコト素ヨリナリ又此コトニ付キテ一種ノ報告雑報等ヲ編成シ其佳品ヲ作り出シタル原由及ヒ培養ノ勉力ナドヲ記載シテ之ヲ江湖ニ広告シ篤志ノ諸輩日一日ヨリ増加シテ其業ノ漸次進歩スヘキヲ期ス」(勸農局三田育種場, 1877: 3) とある。明治 10 年 (1877) は三田育種場開場の年で、この

とき前田正名はいずれ農業が盛んになれば、「欧州各地ノ如ク諸府県下ニ農業会社」が誕生してくると考えていたことが看取できる。ただし、三田育種場を母胎として農会が誕生するとは、思っていなかったであろう。

「はじめに」で引用した大日本農会の「本会創立ノ概略」による限りは、大日本農会の母体は、これまで述べてきた東洋農会と東京談農会、および別稿(友田, 2004: 16-24)で検討した開農義会の3つの農業結社である。ところが、これらの農業結社以外に混同農会をも大日本農会の母体の一つとみなす見解が存在する。しかし、そのような見解は誤りである。混同農会の会員は、たしかに大日本農会の会員にもなっている。しかしそれは混同農会が大日本農会の母体となったということではなく、これとは別個の駒場農学校試業科生徒の同窓会的な組織として、大日本農会と並行して運営

されていたのである(友田, 2005: 134-141)。この他、農会類似の農業結社として、全国的なものでは津田仙の学農社があり、あるいは地方的な結社としては、例えば足柄勸農会議などの結社がある。学農社の人々には津田仙をはじめ、大日本農会の創設と同時にその会員となった人々が多くいるが、組織的には大日本農会とは別個の結社として、その後も長く『農業雑誌』を中心に活動を続けている。また、足柄勸農会議は「足柄県管下に於て本月(明治8年(1875)12月)一日同志の輩相謀り勸農会議を起し」(開農義会同盟, 1875b: 12丁)創設されたもので、梅原寛重などがその中心であった。このような地方農業結社は他にも多く創設されたと思われるが、なお不明な点がほとんどであり、これら地方農業結社と大日本農会との関係については、今後さらに検討を加えていきたい。(以下、次号)

## 注

- 1) 例えば、小倉(1954: 278-290)や武田(1960: 3-56)などである。
- 2) 『岩山敬義報告理事功程』については、友田(1997: 37-49)が詳しい。また、同時期における欧米農会の日本への紹介については、友田(1996: 40-52; 1999a: 25-38; 1999b: 13-27)を参照されたい。
- 3) 開農義会については友田(2004: 16-24)を、学農社については友田(1993: 79-90)を参照されたい。
- 4) 小澤善平は生食用ブドウ品種デラウェアの導入者として知られ、また『葡萄培養法摘要』、『葡萄培養法』などの著書も著名である。
- 5) タキイ種苗の瀧井治三郎は明治39年(1906)に上京して谷本清兵衛の知遇を得ているが、谷本は「当時天下に鳴り響いた種苗問屋」で、「そのころ既に六十の坂を越した老人」であったと回想している(瀧井, 1964: 41-42)。
- 6) 池田謙蔵が小柳津勝五郎と出会ったのは明治17年(1884)であった。池田は「小柳津君は明治十七年に焼土肥料の発明をしましたと云ふことを農商務省に申出た人である。それで西郷従道さんが其時の農商務卿であり、さうして土を焼いて肥料になるものならば結構なことであるから、試験をさして見ると云ふことで、それから農務局長の岩山敬義と云ふ人から手紙を私に書いて、さうして属官二人を付けて三田の育種場に寄越されました」(実業之世界社編, 1913: 54)と述べている。また小柳津勝五郎自身も「明治十七年に上京して三田育種場に参つた、すと場長池田謙蔵氏は農商務省の若林、築山、両技師と共に此の焼土肥料に就いて種々検査を遂げた」(小柳津, 1912: 13)とし、これを裏付けている。池田謙蔵は『成功失敗 天理農法実験談』に巻頭文(実業之世界社編, 1912: 1-12)を寄せて、天理農法の普及に大いに力を振るっているが、前田正名などもこの農法の賛同者の一人であった。ちなみに、小柳津の『貳培収穫天理農法』はよく売れた著書のように、筆者の所蔵本では大正3年(1914)で23版を重ね、さらに昭和21年(1946)にも『二倍収穫農作法』と改題して帝都出版株式会社から再刊されている。小柳津勝五郎については、とりあえず友田(1984: 470-473)を参照されたい。
- 7) 以上は田村(1998: 155)および前田(2000: 236)による。
- 8) 土屋と高野については、上野(1977: 52-89)や麻井(1992: 83-100)などを参照されたい。麻井によれば「内山平八は帰朝後、三田育種場に勤務し、下目黒の用地で仏国撰種法と称する品種改良を担当した」とされる。また仮説実験授業で知られる板倉聖宣氏は「フランスには、元植木職人で勸業寮につと



めていた内山平八という人がバリに出張中でした。そこで勸業寮では、一八七八(明治一一)年一月、その内山平八(一八五二〜一九二二)さんに、『ビルモラン商会の農場その他に留学して、そこでのタネの取り方について実地におそわってほしい』と頼んだのでした(板倉, 2002: 32)と述べている

が、出所は不明である。

- 9) ウィーン万国博覧会で「園庭築造法」を担当した人物に内山平右衛門という人物がいる。この人物は内山平八となんらの関係があるのではないかと推測される。

## 引用・参考文献

- 麻井宇介 (1992) 『日本のワイン・誕生と揺籃時代』 日本経済評論社。
- 足立元三 (1997) 「文明開化の旗手・小澤善平の生涯—その手記から—」 『甲斐路』 山梨郷土研究会, 第 87 号, 1-14。
- 池田謙蔵 (1889) 「本会報告百号発行に就きて一言す」 『大日本農会報告』 大日本農会, 第 100 号, 5-6。
- 池田謙蔵 (1915) 「明治維新後に於ける園芸事業の発達」 『明治園芸史』 日本園芸研究会, 11-16。
- 板倉聖宣氏 (2002) 『白菜のなぞ』 平凡社。
- 上野晴朗 (1977) 『山梨のワイン発達史』 山梨県東山梨郡勝沼町役場。
- 内山平八 (1881) 「法蘭西滞在中の話」 『農談雑記』 第 1 篇, 1-4。
- 岩壁義光 (1985) 「明治一一年巴里万国博覧会と日本の参同」 『神奈川県立博物館研究報告—人文科学—』 第 12 号, 92-124。
- 奥 青輔 (1880) 「北亜合衆国加里福尼州立農事会社條例・同州立会社二関スル諸法令ノ附言」 『東洋農会四季報告』 東洋農会, 第 4 号, 32-51。
- 小倉倉一 (1954) 「明治前期農政の動向と農会の成立」 農業発達史調査会 『日本農業発達史』 中央公論社, 第 3 卷, 219-386。
- 小柳津勝五郎 (1912) 『貳培収獲天理農法』 実業之世界社。
- 開農義会同盟 (1875a) 『開農雑報』 開農義会同盟, 第 1 号。
- 開農義会同盟 (1875b) 「附録」 『開農雑報』 開農義会同盟, 第 9 号。
- 学農社 (1876) 『農業雑誌』 学農社, 第 1 号。
- 片寄 俊 (1931) 「大日本農会創立五十周年回顧」 『大日本農会報』 大日本農会, 第 607 号, 35-38。
- 勸農局三田育種場 (1877) 『三田育種場農産会市ノ順序』 三田育種場。
- 実業之世界社編 (1912) 『成功失敗 天理農法実験談』 実業之世界社。
- 実業之世界社編 (1913) 『天理農法 燐炭栽培』 実業之世界社。
- 祖田 修 (1973) 『前田正名』 吉川弘文館。
- 大日本農会 (1881) 「本会創立ノ概略」 『大日本農会報告』 第 1 号, 1-2。
- 瀧井治三郎 (1964) 『種苗七十年』 タキイ種苗株式会社出版部。
- 武田 勉 (1960) 「解題—明治前期農政の動向と大日本農会の社会的役割—」 『大日本農会報 明治年間記事索引目録』 農業総合研究所, 3-56。
- 龍田退蔵 (1880) 「告本会諸君」 『東洋農会四季報告』 東洋農会, 第 4 号, 151-152。
- 田村貞雄 (1998) 『徳川慶喜と幕臣たち』 静岡新聞出版局。
- 帝国農会史稿編纂会 (1972) 『帝国農会史稿 記述編』 農民教育協会。
- 東京談農会 (1881) 「緒言」 『農談雑記』 東京談農会, 第 1 篇。
- 東洋農会 (1880) 「社言一章」 『東洋農会四季報告』 東洋農会, 第 1 号, 1-3。
- 友田清彦 (1984) 「解題」 『明治農書全集』 農山漁村文化協会, 第 10 卷, 445-479。
- 友田清彦 (1993) 「学農社『農業雑誌』 総目次 (1)」 『農村研究』 東京農業大学農業経済学会, 第 76 号, 79-90。
- 友田清彦 (1995) 「『米欧回覧実記』 と日本農業」 『農業史研究』 農業史研究会, 第 28 号, 40-54。
- 友田清彦 (1996) 「岩倉使節理事官『理事功程』 と日本農業 (1)」 『農村研究』 東京農業大学農業経済学会, 第 83 号, 40-52。
- 友田清彦 (1997) 「岩倉使節理事官『理事功程』 と日本農業 (2)」 『農村研究』 東京農業大学農業経済学会, 第 84 号, 37-49。
- 友田清彦 (1999a) 「ウィーン万国博覧会と日本農業 (上)」 『農村研究』 東京農業大学農業経済学会, 第 88 号, 25-38。
- 友田清彦 (1999b) 「ウィーン万国博覧会と日本農業 (下)」 『農村研究』 東京農業大学農業経済学会, 第 89 号, 13-27。
- 友田清彦 (2002a) 「農政実務官僚岩山敬義と下総牧羊場 (1)」 『農村研究』 東京農業大学農業経済学会, 第 94 号, 15-26。

- 友田清彦 (2002b) 「農政実務官僚岩山敬義と下総牧羊場 (2)」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第95号, 2002年9月, 78-90。
- 友田清彦 (2003a) 「下総牧羊場の系譜 (1)」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第96号, 25-35。
- 友田清彦 (2003b) 「下総牧羊場の系譜 (2)」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第97号, 70-81。
- 友田清彦 (2004) 「開農義会と『開農雑報』」『農業経済研究』日本農業経済学会, 第76巻第1号, 16-24。
- 友田清彦 (2005) 「混同農会に関する一考察」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第100号, 134-141。
- 農商務省農務局 (1882) 『府県老農名簿』農商務省農務局。
- 農務局 (1957) 『農務顛末』農林省, 第6巻。
- 農林省農務局 (1939) 『明治前期勸農事蹟輯録』農林省, 上巻。
- 藤井隆至・滝沢秀樹 (1990) 「農業雑誌」杉原四郎編『日本経済雑誌の源流』有斐閣, 124-167。
- 二葉憲香・福島寛隆編 (1973) 『島地黙雷全集』第5巻, 本願寺出版部。
- 前田匡一郎 (2000) 『駿遠へ移住した徳川家臣団』私家版, 第4編。
- 真柳 誠・矢数道明 (1991) 「『曲直瀬』姓の由来」『日本東洋医学雑誌』42巻1号, 93。

(受付 2005 年 11 月 15 日)  
(受理 2006 年 1 月 11 日)

## Agricultural Societies in the Early Stages of Meiji Era and *Dai-Nipponn Noukai* (1) : *Touyou Noukai* and *Tokyo Dannou-kai*

Kiyohiko TOMODA (Tokyo University of Agriculture)

*Dai-Nipponn Noukai* was associated as the first nationwide agricultural society in Japan in 1881. This society played a very big role in the history of Japanese agricultural policy in Meiji Era.

Therefore, this paper focused on the foundation of *Dai-Nipponn Noukai* and clarified the following.

1. In the foundation of *Dai-Nipponn Noukai*, *Touyou Noukai* and *Tokyo Dannou-kai* became two major origins of this society.
2. *Touyou Noukai* which was founded in 1870 in Chiba prefecture was an agricultural society associated with those concerned with Simofusa Seep-breeding Farm (*Simofusa Bokuyou-jyou*) as pivotal members.
3. *Tokyo Dannou-kai* which was founded in 1870 in Tokyo was organized by the people concerned with Mita Seed-breeding Farm (*Mita Ikusyu-jyou*).
4. In the foundation period of *Dai-Nipponn Noukai*, most of the special members were government agriculture bureaucrats and local agriculture bureaucrats.

**Key words** : agricultural policy in Meiji Era, agricultural Society, *Dai-Nipponn Noukai*, *Touyou Noukai*, *Tokyo Dannou-kai*